

紹介

●熾仁親王行實

本書は去る明治三十一年有栖川宮家より刊行された熾仁親王行實が事實の考證を先とし資料の全文を引抄してあるが爲めに専門史家の參考に供するに足るも一般世人の閱讀に便でない爲め、同宮家の祀を繼がせられた高松宮家に於て夫れを通俗易解を旨とする編述に改めんとせられて平山成信、杉榮三郎二氏を顧問とし久保得二、芝葛盛、布施秀治、武田勝藏の四氏を編修として昭和二年二月より編修に着手し本年八月に至つて完成したから直ちに出版して世に出されたのである。編修の本旨は概ね舊行實に準據してあるが、新たに諸方面より従前殆んど遺却された文書類を採録し、又親王に陪侍した諸人の談話をも聴取し、幾多の新資料を加へて其面目を一新してある。其の内容は、御幼年時代、御成年時代、攘夷建白と公武合體の經過、攘夷勅問奉答並に朝參停止、大政復

古と總裁、東征大總督並に東下、東京御移徙、福岡藩知事、御東歸、元老院議長並に議定官、山陵親祭供奉、西南の變と征討總督、陸軍大將兼議長、左大臣兼任、東北巡幸供奉、憲法制定の御翼賛、露國皇室御訪問、歐米各國御巡遊、御歸朝後の三年間、參謀本部長と近衛都督、參謀總長兼任、神宮祭主兼任、明治二十七八年戰役と大本營出仕、舞子御靜養と薨去、御性行の一斑、學問技藝の御造詣、嗜好と遊戯の御事ども、御軼事、妃貞子略歴、妃董子略歴の章を立て、親王が幕末より明治に亙り庶政に參畫し皇誤を輔翼せられた赫々たる御偉勳並に崇高醇粹何人も瞻仰せざるなき御德行等を詳細且つ平易に叙述し附するに有栖川宮略系圖、熾仁親王略年譜、各國勳章受領表を以てし、又各所に數十葉の寫眞が挿入してある。熾仁親王印譜は之を別冊とし、和裝紙數九十九枚の内に王が日常用ひられた各種の御印章が收めてある。(菊版上下二卷、合計八九四頁、高松宮御藏版)〔松野〕

●明治維新史研究

史學會編

永い要望の中にあつた本書が新裝を凝らして提出され

た。大家新進二十七氏が各々その蘊蓄を傾けて一堂に會した姿は、人々の期待を裏切らぬ壯觀である。我國歴史上の誇りである明治維新の意義過程があらゆる方面から論ぜられて盡くせりの觀がある。通讀後の一感想として維新史は三上博士が序文において指示さるゝ如く、今日は何等の制肘さるゝ事なく學問對象となり得て、又特殊な事情から諸方面の關心をひいて流行のものになつて居る。然しこの事は同時に科學的に正しく認識され始めた事を意味しない。此等の諸篇を通讀して或る複雑さについて不思議な印象を受けるのも、對象において變化あるのみでなく取扱ふ精神に多く異にする所あるによるのであらう。これはまた現代における維新史研究についての混沌の姿を示してゐる。然し稍ともすれば回想録的であり勝ちなこの時代について、總てに科學的態度を求めろのは不可能であらう。あるものについては、に提出された事實の闡明がやがて行はるべき維新史研究の手だてとなる事をもつて満足すべきであらう。編者の意も亦こゝにある如く思はれる。さうして「今日において、圈點

編者による）求めらるゝ、最高のものとして、現今の維新史研究の記念として比類なき價値を持つ。尙諸編が正しく整序されて綜合的理解に便ならしめた編者の意企を多しとして、維新史研究家に推薦する。（菊版八五二頁、三・八〇、富山房發行）〔藤〕

● 近江奈良朝の漢文學

本書は故岡田正之博士が大正九年に東京帝國大學へ提出された學位論文で、本年七月二十八日同博士の三週忌辰に當り、遺族友人及び門生が相謀つて記念として東洋文庫論叢第十として出版されたものである。博士は支那傳來の漢文學が我國民の性情志氣に與へた影響は頗る著大にして更に我邦に生れた漢文學が我が國民思想の上に一段の切要なる感化を及ぼしたものであるにも拘はらず世人は動もすれば我邦に生れた漢文學を我が國文學史上より疏外せんとするは我が祖先の苦心を没却するものであり我が國文學の範圍を狭くするものである。故に其の變遷の跡を明にし醇健なる思想を高雅なる趣致を後來の國民に傳へるは現代國民の一大義務であるこの見地よ